

岐阜市科学館コロナ対策強化 密なエリア、A I が判別



端末に表示されたカメラ映像や密集状況のデータ
＝岐阜市本荘、岐阜市科学館

業務用ソフトウェア開発のテクノア(岐阜市本荘中ノ町)が、人工知能(AI)の画像認識を利用し工場設備の稼働状況を可視化するシステム「A-Eyeカメラ」を、同市本荘の市科学館に無償提供し、来館者の密状況のモニタリングに活用している。同館担当者は「密状況を見れば展示ごとの人気状況も分かるので、今後の施設運営にも活用できる」と期待する。

(山本貴史)

テクノア無償提供「人気展示も分かる」

A-Eyeカメラは同社が今年3月に発売したシステム。工場などの製造現場に、ネットワークにつながったカメラを取り付け、作業員や設備の稼働状況をAIが判別して端末上で稼働率などが確認できる。これまでに約60社に導入している。

同館は現在、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、館内に滞在する人数を300人までと決めている。エリア別の密集状況を把握するため8月上旬にシステムを導入し、カメラ9台を展示スペースなどに設置した。カメラが捉えた画像内に人がいるかいない

かをAIが判別。画像内で密集している場所があると、その部分を青く表示する。密集状況が続くほど青色が濃くなる。データを集計し、展示方法の見直しや展示品の配置を変えといった改善につなげられる。

同館の安田晋一郎学芸係長は、密集回避に加えて展示内容の充実にもデータを活用できると考えており、「長期的にシステムを運用して館内全体のサービス向上に生かしたい」と話す。同社の山崎耕治社長は「自社の技術を社会貢献に利用できることは喜ばしい。今後困っている施設があれば相談してもらいたい」としている。